

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒にいる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。

旧約聖書は、創世記からはじまり人間が、神によってつくられたと書き記されています。その歴史は人間の歴史であり、同時に神の歴史でもあります。神は人間が思い通りにすることをゆるさず、しきりに人間に干渉し、歴史に介入してきます。

なぜなら、人間が神の意志に反することを繰り返し行うからです。エヴァは蛇に唆され善悪の知識の木から実をとって食べた、ひとりではなく、アダムを誘ってであった、女を騙した蛇が悪い、誘ったエヴァが悪いと男と女は自分の責任を他にすりつけることをはじめました。神はエデンの園からふたりを追放されます。以来、女は産みの苦しみを、男は労働の苦しみを負うようになった、いのちを生きながらえるために苦しみが課せられたのです。

善悪を知ることによって生きる根本が変えられたのです。そのうち二人の息子が与えられたが、カインは嫉妬のゆえにアベルを殺害する。…、バベルの塔を造って神にまで届こうとした。ノアの時代に至っては、人間の世界には悪がはびこった…。

そういう歴史を書き記してきた旧約聖書の創世記からはじまり申命記あたりまで、聖書は、人間に対して、神の意志に適うように生きることが正しいことだということを伝えるのです。そこでユダヤ教では創世記から申命記までを律法と呼び、神の意志である律法に従う生き方をすすめるように、すなわち正しいひととして神の意志にならざることを生きるということ教えるのです。

申 4・8 またわたしが今日あなたたちに授けるこのすべての律法のように、正しい掟と法を持つ大いなる国民がどこにいるだろうか。

ヨセフはそういう意味で正しいひとだったのです。律法に従って神との関わりを正しくしようと思えば、離婚するのが最善の策でしょう…

申 24・1 人が妻をめとり、その夫となつてから、妻に何か恥すべきことを見だし、気に入らなくなつたときは、離婚状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせる。

つまり、マリアが身ごもったことにより、ヨセフと周囲に誤解と混乱を引き起こしたのです。ここでヨセフがマリアを離婚すれば、マリアは一生涯ユダヤ社会ではまともに生きていくことができなくなるのは間違いありません。そこに天の使いが現れて言います…

20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え

入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿つたのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

ここでヨセフは、人生の岐路に立たされます。彼の前には二つの道があります、その分岐点に立っているのです。

一つの道は、人間としての立場にとどまり、人間としての理解と判断にもとづいて対応することです。マリアが妊娠したことは、申命記に記されている「何か恥すべきこと」と断定する、そして律法に従って離婚する。彼自身も深く傷つくだろう、しかし社会的な体裁を保ち、時間とともに忘れ去るだろう。そしてマリアは彼以上に深く傷つき、社会からタメ印の烙印を押され、苦難の道を歩むことになるでしょう。

もう一つの道は、夢に現れた天の使いの言葉(23節)に信頼する道です。その道を選び取るならば、生まれてくる男の子をイエスと名づける、そして、その子が自分自身を含めてユダヤの民を罪から救つのだと信ずるのです。

これは律法を超える神の言葉(預言)、イザヤに由来する言葉でした。

イザ 7・14 それゆえ、わたしの主が御自ら／あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ。